

2014年度春季企画展

世界への跳躍、限界への挑戦 早稲田スポーツの先駆者たちとその時代

はじめに

早稲田スポーツ——。そう一口にいても、担い手である体育各部の数は今や44を数えます。しかし、東京専門学校が早稲田大学へと名をあらためた1902（明治35）年の時点では、わずかに柔術・撃剣・弓術・野球・庭球・短艇の6部が公認されていたに過ぎません。

本展示会では、それからやや後れて、1914（大正3）年に正式な形で発足した競走部にスポットを当てます。今年で創部100周年を迎えた早稲田大学競走部は、学生陸上界、延いては日本陸上界の牽引車でありつづけてきました。その歴史のなかでも、特に数々のメダリストを輩出した昭和戦前期の黄金時代は、今なお伝説的に語り継がれています。そのため、そうした輝かしい記録を列挙するだけでも、あるいは、たった一人の選手に着目するだけでも、この会場を埋め尽くすことはできるでしょう。

しかし、本展示会では、あえて4人の先駆者——沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平——を取り上げ、彼らの人間性や互いの友情を読み解こうと努めました。個々人の素質のみが、彼らをメダリストたらしめたわけではありません。それは苛酷な練習の日々のなかで、自己に鞭打つモチベーションや、切磋琢磨する仲間があってこそのことではなかったでしょうか。

本展示会が、（早稲田）スポーツ愛好家のみなさまにはもちろん、普段スポーツに接する機会の少ないみなさまにも、明日につながるような新しい「発見」をもたらすことができれば幸いです。

最後になりますが、本展示会開催に当たり、ご協力をいただいた独立行政法人日本スポーツ振興センター（秩父宮記念スポーツ博物館）、広島県安芸郡海田町、北海道開拓記念館、北海道立総合体育センター（北海きたえーる）をはじめ、関係各位・各機関に、あらためて御礼を申し上げます。

2014年3月

早稲田大学大学史資料センター

※本図録に掲載した写真・資料は、展示会場に陳列したものの一部です。

I

早大競走部の4巨星

——イントロダクション——

「近代オリンピック復活の父」とも称えられるフランスのピエール・ド・クーベルタン男爵(1863～1937)は、次の言葉を残している。

その人が成功したかどうかを決めるめやすは、勝利者であるかどうかではなくて、努力をした人であるかないかである。人生でいちばん大切なことは、勝つということではなくて、正々堂々と奮闘することである。

(『オリンピックと日本スポーツ史』より)

早稲田スポーツの先駆者にして、早大競走部黄金時代の立役者——**沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平**の4人は、世界的な競技者であったばかりではなく、まさにクーベルタン男爵が理想としたスポーツマンシップを体現した人格者でもあった。

この4人が競走部に勢揃いした期間は、必ずしも長くはない。しかし、彼らはその前後を通じて互いを意識し合い、よきライバルとして、またよき友人として、太く長い人間関係を築いていた。一大学の競走部から日本の陸上界へ、そして日本陸上界から世界の舞台へと、まるで階段を駆け上るようにして飛躍していった4人の栄光は、そうした親密な関係に根ざし、支えられていたのである。

ユニフォームは汗にぬれ、パンツは泥にまみれる。

空間に向かって、高く、遠く跳び上がっている。

放り出されたやりやハンマーが空を切ってうなり、静寂を破る。

そこには、ただ、陸上競技のとりことなり、走神への挑戦に苦悩する選手の姿があるだけである。

(戸田純『走神への挑戦』より・織田幹雄序文)



沖田芳夫 OKITA Yoshio

- 1903(明治36)年 3月28日 広島県に生まれる。
 広島一中時代から投擲競技(砲丸投げ・円盤投げ・ハンマー投げ)の選手として全国的に活躍。
- 1923(大正12)年 4月 早稲田大学第一高等学院に入学。
- 1927(昭和2)年 **黄金時代の競走部主将**となる。
- 1928(昭和3)年 アムステルダム五輪に出場。
- 1929(昭和4)年 3月 早稲田大学商学部を卒業し、三省堂に入社。
 その後も、ロサンゼルス五輪・ベルリン五輪のヘッドコーチを務めるなど、指導者として陸上競技の発展に尽力。
- 1956(昭和31)年 早大競走部の監督に就任(～1967年)。幾人もの名選手を育て上げる。また、早稲田アスレチック倶楽部(WAC)会長として競走部OB会を率いる。
- 2001(平成13)年 4月28日 永眠。



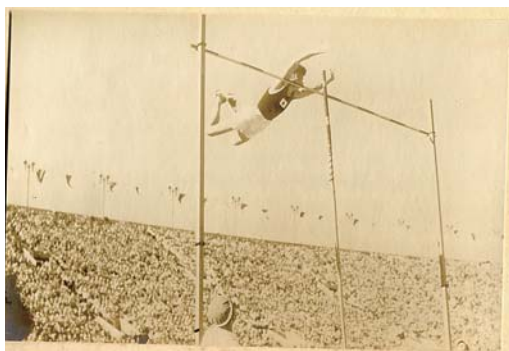
織田幹雄 ODA Mikio

- 1905(明治38)年3月30日 広島県に生まれる。
 沖田芳夫とともに、広島一中時代から陸上競技に親しむ。跳躍競技（三段跳び・走り幅跳び・走り高跳びなど）を中心に多才を発揮する。卒業後2年間、広島高等師範付属臨時教員養成所に在籍。
- 1925(大正14)年4月 早稲田大学第一高等学校に入学。
- 1928(昭和3)年 前回のパリ五輪（三段跳び6位入賞）につづき、アムステルダム五輪に出場。**三段跳びで日本人初の金メダルを獲得。**
- 1929(昭和4)年 沖田の後を継いで競走部主将となる。
- 1931(昭和6)年3月 早稲田大学商学部を卒業し、大阪朝日新聞社に入社。同年、**三段跳び世界記録（15m58）を樹立。**
- 1932(昭和7)年 ロサンゼルス五輪に出場。
 その後も新聞記者を務める傍ら、博識の理論家として後進の指導に当たる。
- 1965(昭和40)年 早稲田大学教授となる（～1975年）。
- 1983(昭和58)年 早稲田大学スポーツ功労者第1号となる。
- 1998(平成10)年12月2日 永眠。



南部忠平 *NANBU Chūhei*

- 1904(明治37)年 5月24日 北海道に生まれる。
 北海中学時代から跳躍競技のほか、短距離走者としても力量を示す。卒業後の一時期、札幌鉄道局に勤務。
- 1926(大正15)年 4月 早稲田大学専門部商科に入学。
- 1928(昭和3)年 アムステルダム五輪に出場(三段跳び4位入賞)。
- 1929(昭和4)年 3月 早稲田大学専門部商科を卒業。
 その後、満鉄・美津野運動具店を経て、大阪毎日新聞社に入社。織田と同様、運動部記者として活躍する。
- 1931(昭和6)年 織田の三段跳び世界記録樹立と同じ日、**走り幅跳び世界記録(7m98)を樹立**(1970年まで日本記録)。
- 1932(昭和7)年 ロサンゼルス五輪に出場。**三段跳び金メダル、走り幅跳び銅メダル、400mリレー5位**の大活躍を演じる。
- 1984(昭和59)年 早稲田大学スポーツ功労者第2号となる。
 またその間、陸上競技の振興に尽力するとともに、京都産業大学教授・鳥取女子短期大学学長なども歴任する。
- 1997(平成9)年 7月23日 永眠。



西田修平 *NISHIDA Shūhei*

- 1910(明治43)年3月21日 和歌山県に生まれる。父は民政党代議士西田郁平。
- 1928(昭和3)年4月 早稲田大学第一高等学院に入学。
中学時代には無名の選手であったが、先輩・織田幹雄の指導もあって急速に頭角を現し、同年、新入生ながら早大競走部英国遠征の代表メンバーに抜擢される。
- 1932(昭和7)年 ロサンゼルス五輪に出場。**棒高跳びで銀メダルを獲得。**
- 1934(昭和9)年3月 早稲田大学理工学部を卒業し、日立製作所に入社。
- 1936(昭和11)年 ベルリン五輪に出場。**棒高跳びで銀メダルを獲得。**
銅メダルを獲得した慶應義塾大学の大江季雄とメダルを折半し、つなぎ合わせたいいわゆる「友情のメダル」が誕生したのはこのときのことである。
戦時中は工兵隊員として出征。無事帰還する。
- 1986(昭和61)年 早稲田大学スポーツ功労者第3号となる。
このほか、戦後、早大競走部監督、日本陸上競技連盟理事長なども歴任し、陸上競技界の発展に貢献する。
- 1997(平成9)年4月13日 永眠。

【主な展示資料】

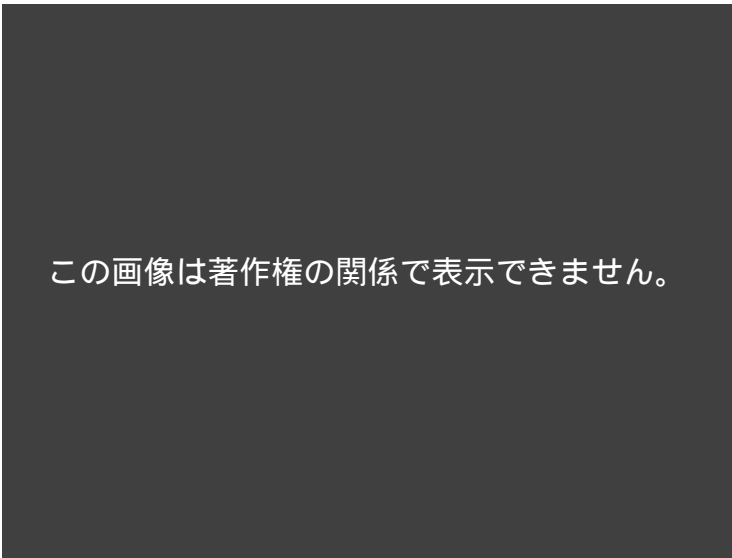
この画像は著作権の関係で表示できません。

織田幹雄が練習で使用したスパイクシューズ（広島県安芸郡海田町所蔵）

身長167cmの織田を、この外寸わずか24cm余りのスパイクが支えていた。

織田の盟友・南部忠平はこう証言している——「〔織田は〕暗くなるまで練習して下宿に帰ると、まず必ずスパイクの手入れをし、それからきちんと日誌をつける」。

そうした織田の習性は、中学時代、反対する父親には内緒で、長兄の援助と自らの小遣い銭とをかき集めて、はじめてスパイクというものを手に入れたときの喜びから発していたのかもしれない。



この画像は著作権の関係で表示できません。

南部忠平のユニフォーム（北海道開拓記念館所蔵）

南部が早稲田大学時代に袖を通し、彼とともに風を切ったユニフォームである。退色はみられるが、「早稲田カラー」をバックに白の「W」が映えるこのデザインと配色は、今なお早大競走部の象徴として受け継がれている。

本展示会で紹介する写真の多くは白黒であるが、このユニフォームは、当時のフィルムには投影されることのなかった鮮やかな色調を、いささかなりともよみがえらせてくれる。

Ⅱ 陸上競技との出会い

中学3年(1920年)の暮れのある日、織田幹雄は体操教室に呼び出された。何事かと恐る恐る出向いてみると、彼のように足腰には自信のある猛者が数人集められており、教官から陸上競技講習会への参加を勧められた。織田はそのとき、はじめて「陸上競技」なるものが存在するを知ったという。

講習会では、その年、ベルギーのアントワープ五輪に出場した十種競技の野口源三郎が講師を務め、実地指導のほか、ルールの解説や大会・記録の紹介なども行われた。織田はその一々をノートに記録し、「陸上競技を頭に詰め込んだ」と振り返っている。彼の長い競技生活は、こうしてはじまったのである。

一方、1922(大正11)年の夏、広島から遠く離れた北海道の一中学校でも、陸上競技はちょっとした話題になっていた。ある生徒が単身津軽海峡を越えて、千葉県で開かれた講習会に参加してきたことがそのきっかけであった。当時北海中学の4年生であった南部忠平は、先輩の強い勧誘に負けて「徒歩部」(当時の北海中学では、陸上競技のほかに山岳部も含めてこう呼んでいた)に所属していたが、その生徒が語る新しい理論や練習法に心を奪われた。それから10年後、オリンピックで金メダルを獲得することとなる三段跳びの正式な跳び方を知ったのも、このときのことであった。

このように、織田や南部が陸上競技と出会った頃は、エリート予備軍である中学生たちの間でさえまだ競技に対する認知度は低く、指導者・指導書の類も求めて得られるものではなかった。したがって、彼らはまず何にもまして情報に飢えていた。1 cmでも遠くに跳ぶには、1 秒でも速く走るには、どうすればよいのか。この練習方法は本当に正しいのか、否か——。つまり、彼らは独立した競技者である前に、探求者として五里霧中のなかを歩まなければならないのであり、だからこそ、情報を交換し、技術を盗み合う仲間やライバルの大切さを理解することができたのである。



沖田芳夫(右)と織田幹雄(左) (中学～高等学院入学前後)

この写真をアルバムに貼付した織田は、その脇に自筆で「仲よし」と書き入れた。

広島一中時代、沖田はもともと織田の一級上の先輩であったが、進級に手間取り、気がつけば織田と同級になっていた。豪放磊落な沖田と、理論家肌^{らいらく}の織田——陸上競技を通じて融合したこの2つの個性は、その後、早大競走部に新たな時代をもたらすこととなる。

なお、沖田を追うようにして早大に入学した織田は、彼の下宿に転がり込み、共同生活を営みながら練習に励んだ。

沖田や織田にとって、下宿の部屋は屋根のあるグラウンドであった。疑問が出たり、新しい技術や、ジャンプやスローイングのタイミングの感覚を思いつくと、部屋の中でさっそくやってみた。畳の上はトラックやフィールドになり、出窓はハードルになり、鴨居は棒高〔跳〕や走高跳のバーになった。

織田はよく本を読み、理論を吸収し、競技技術を分析し、総合し、新しい技術を創出した。それに対して沖田は、内外の投擲フォームの写真を集めて、眺めている。その写真から新しい技術を身体で感じてゆくという方法であった。

(『沖田芳夫伝 グランドに生きる』より)

織田君は合宿や遠征の時、いつもスポーツの研究書を山ほどトランクに詰込んで持ってゆく習慣があった。道中での、その運搬人はいつも沖田さんだった。彼はトランク搬びをウェイト・トレーニングの一つとして採り入れていたのである。
(同上・南部忠平談)

【主な展示資料】



織田幹雄のスクラップブック 大正年間 2冊（大学史資料センター所蔵）

陸上競技をはじめた広島一中時代から、織田は関連する新聞・雑誌記事を丹念に調べ上げ、スクラップしていった。学究肌で几帳面な織田の性格を窺うことができる。なお、写真の上部にみえている付箋は織田自身が後年貼付したものである。

Ⅲ

早稲田大学時代と3度のオリンピック

1 早稲田大学競走部

沖田芳夫は中学時代から、早稲田大学への進学を公言していた。無双の投擲陣を誇る早大競走部への憧れからである。織田幹雄も、やはり沖田を追って強豪・早稲田の一員となることを選んだ。高等学校から帝国大学へ、というエリートコースを志望する学生が多かった名門・広島一中生のなかでは、確かに異色であったといえる。

また、1925(大正14)年、第7回極東大会(マニラ)に参加するため、神戸港を出発した南部忠平は、ある不思議な光景に接した。いつまでも追いかけてくる一隻の舟から、「都の西北」が聞こえてきたというのである。それは、同大会に参加する早大の選手に対する学生や校友たちのほなむけの合唱であった。以来、南部もまた「早稲田がいつべんに好きになって」しまった。

早大競走部の練習は、毎日午後3時頃から第一高等学院グラウンドで行われた。高等学院の用務員さんが詠んだ「雪の日や円盤投の沖田さん」との一句が物語るように、それは文字通りほとんど毎日行われた。入学一年目の織田は、すでに(パリ)オリンピック入賞選手であったが、授業が終わるや真っ先にグラウンドに飛び出し、上級生がやってくるまでに器具の準備やトラックの整備を済まさなければならなかった。

さらに、彼らの練習はグラウンドの上だけで完結するものでもなかった。例えば、織田は日本にはまだ少なかった指導書を海外から取り寄せては研究を怠らなかったし、南部は練習後、友人たちと銭湯に出かける際には必ずバトンを持参し、道中、バトンパスの練習に励んだと回想している。南部のいうように、「日常生活の中に練習が溶け込んでいた」のである。

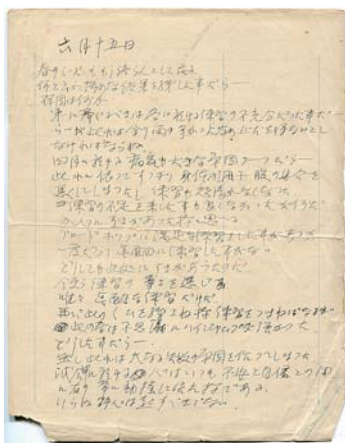


第一高等学院グラウンド 1932年頃（大学史資料センター所蔵）

「グラウンド」というよりはむしろ「原っぱ」とでも表現したほうがよさそうにも見えるが、ここから数々の世界的なアスリートが羽ばたいていった。1周はわずか280m ほどしかなく、「どこから円盤や鎗が飛んでくるか見当もつかないし、トラックにいればいたで、後ろから長距離の連中が追い抜いて行くし、横からはハードルの連中がぶつかってくるというありさまで、油断もスキもあったものではなかった」（南部忠平）という。

場所はちょうど現在の文学学術院校舎（戸山キャンパス）のある高台で、高等学院の校舎は現在の記念会堂の辺りに建っていた（写真にはその屋根のみが映っている）。

【主な展示資料】



織田幹雄のノート 「練習記録」 1926～28年頃（大学史資料センター所蔵）

日々の練習のなかで、織田は自らの記録の推移をこと細かに記録していた。写真はノートに挟み込まれていた日誌の断片（1927年カ）。「唯々真面目な練習だけだ」などとある。

競走部監督・山本忠興（1881～1951）



電気工学の専門家として早稲田大学で教鞭をとった山本は、教育者として、またクリスチャンとして歴史にその名を刻んでいるが、彼がスポーツの振興に果たした役割も決して小さいものではない。

1917(大正6)年から25年の長きにわたって競走部の監督を務めた山本は、多忙にもかかわらず毎日のようにグラウンドを訪れ、部員たちの練習を見守っていたという。彼は陸上競技の専門家というわけではなかったが、その存在は、南部忠平曰く「僕たちの心の支え」であった。「みんなの練習が終るまで木陰に立ちっぱなしで見て下さる姿が、どんなに心強かったでしょう」。

競走部の黄金時代を物語る海外遠征ラッシュも、多くは山本の発案によるもので、その費用の工面にも心を砕いた。

織田幹雄と南部忠平



写真は大隈記念講堂前にて 珍しい学帽姿の織田（左端）と南部（中央）。

競技種目が似通っていた2人は、深い信頼関係で結ばれたよきライバルであった。

織田君とは、同じ跳躍と短距離を目指していることもあってだんだん打ち解けてきて、そのうち織田君の下宿にもときどき遊びに行くようになった。そこで見た彼の生活ぶりは実に立派なもので感心することばかりだった。……私はそんな織田君を尊敬し、彼の跳躍中の写真を自分の机の前に貼って、いつも自分を励ましていたものだ。

正月など、私が札幌へ帰郷できないでいると、織田君は、「おれの家へこいよ」と、広島の実家へ連れて行ってくれた。宮島などの名所を見て回ったり、瀬戸内海で獲れたばかりのカキをたくさん食べさせてもらったりした。

（南部忠平『紺碧の空に仰ぐ感激の日章旗』より）

新星・西田修平

1928(昭和3)年4月、早大の門をくぐった西田修平の加入によって、競走部の黄金時代は本格的な幕を開けた。無名の選手であった西田が急成長を遂げた背景には、彼自身のひたむきな努力と、先輩・織田幹雄の存在があった。

（織田）

早大に入って来た西田修平君は、全く無名の中学選手に過ぎなかつた。……もちろん、練習でも相手にされず、初めの中は、四人の〔先輩の〕練習を手伝われるに過ぎなかつた。

四人の練習が終つて、初めて自分の練習に入れるのだが、手をとつて教える人もなく、ただ一人残つて、黙々と練習する様子を、いつも、遅くまで練習している私は、じつと見ていた。……余り熱心なので、私も暇を見て、時々、練習を手伝つてやつた。

（織田幹雄『跳躍一路』より）

（西田）

日本の一流選手の揃っている早稲田のトラックにしては、甚だお粗末な感じがしたが、出てきた顔を見ればこれは大したもの。あれが沖田さん、住吉〔耕作〕さん、こちらが織田さん、南部さん、アサヒスポーツや新聞で見た顔が目前にあるのだから驚きだ。……織田さんも、別の種目の練習があるのでおそくなり、たまたま棒高跳のところに來られて、注意を受けたことがある。こんな時は下宿へ帰った後も、うれしくて思い出しては快哉を叫びたくなることもあった。

（『早稲田大学競走部七十年史』より）

2 黄金時代の現出——1928(昭和3)年

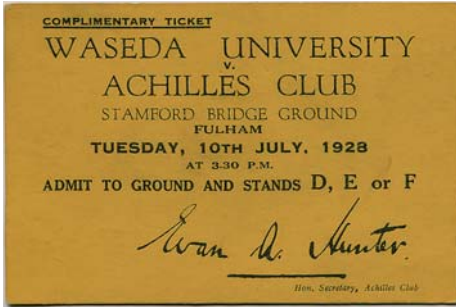
1928(昭和3)年、ついに沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平の4人が早大競走部に勢揃いした。それは早稲田スポーツの歴史にとっても、また日本のスポーツ界にとっても、記念すべき濃密な一年となった。自己の限界に挑みつづけてきた彼らの、世界への跳躍が開始されるのである。

5月、早大競走部は第1回日本インカレに優勝、つづく6月の早慶対抗陸上にも史上例をみない大差で勝利すると、国内に敵なしとして標的を海外に定めた。山本忠興監督の奔走もあって、すぐさまイギリスの名門・ケンブリッジ・オックスフォード両大学の学生・OBからなるアキレスクラブとの対戦が決まり、沖田・織田・南部らオリンピック出場組を中心とする総勢22名の選抜メンバーは、シベリア鉄道経由で訪欧の途についた。試合自体は僅差で敗れたとはいえ、単独チームによる海外遠征は日本陸上史上初の快挙であった。

そしてオランダ、アムステルダム——。山本忠興総監督のもと、第9回オリンピックに臨んだ日本男子陸上メンバーは16名、そのうちの9名までが早大競走部の猛者たちであった。8月2日、三段跳び決勝で織田が15m21をマークして日本人初の金メダルを獲得。ついに世界の頂点に上り詰めた。

さらにその後、早大競走部はパリで開かれた第2回国際学生陸上(ユニバーシアードの前身)、大連で開かれた日仏対抗陸上をはしごしてようやく帰国。10月には関東インカレで4連覇を達成するとともに、翌月の関西学院との対抗試合にも圧勝した。まさしく黄金時代と呼ぶにふさわしい一年は、こうしてまたたく間に過ぎていった。

【主な展示資料】



早稲田大学対アキレスクラブ戦の招待券(左)と記念メダル(右) 1928年
(大学史資料センター所蔵)

この対抗試合で、織田幹雄は、「競技とは自分が全力をだしたかどうかであり、順位というのは問題でない」という英国選手の言葉に強く胸を打たれた。

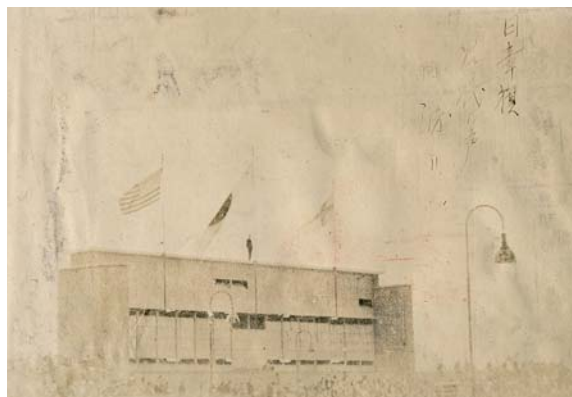
つづくオリンピック決勝の前日、「どうしても優勝しなければ」と気負い込んでいた織田は、その言葉を思い起こしてようやく眠りに就くことができたという。

この画像は著作権の関係で表示できません。

織田幹雄 アムステルダム五輪三段跳び金メダル 1928年
(個人蔵)

当時、メダルの授与式は会期の最終日に行われていたが、織田はパリで開かれる国際学生陸上に参加するため出席することができず、水泳で日本人2人目の金メダルを獲得した鶴田義行が、織田の分もあわせて受領した。

涙の8月2日



ボールの中央に揚がった特大の日章旗。織田幹雄はこの写真に「日章旗君ヶ代乃声 涙!!」と書き込んでいる（西田修平旧蔵）。

その日、出番を待つ織田幹雄・南部忠平の前で、日本人女性唯一の参加者・人見絹枝が出場する女子800m 決勝が行われた。それは「ゴールにはいった全選手が倒れ、目をおおわせる悲壮なレース」であったといい、2位に輝いた人見もその場に倒れ込んでしまった。織田と南部はすぐさま駆け付け、人見を抱きかかえた。そして2人は、男子選手から「あねご」と慕われる気丈な人見が、表彰式で声を上げて泣く姿をみた。

直後に行われた三段跳び決勝で優勝した織田は、その日の日記に次のように記している——「遂に永い間の苦心は報いられた。日章旗が高々と揚げられ国歌が奏せられた時は自然と頭が下がり国旗をあふぐ事さえ出来ず涙が自然にあふれ出て来た」。人見につづき、織田もまた、人目をはばかることなく嬉し涙を流すことができたのである。

ところが、その表彰式ではちょっとした椿事が発生していた。日本人が表彰台に上るとは思いもしなかった主催者側には日章旗の用意がなく、急遽、南部が山本忠興監督から預かっていた特大の日章旗（外国人選手を真似て、日本人が優勝したらそれで全身を包んでやる予定であった）がボールの中央に揚がることとなったのである。さらに、「君が代」は「さざれ石」からはじまるというドタバタ振りであった。その一部始終をみていた西田は、それでも、「何だかうれしくてわけがわからず涙が出てきたのを覚えている」と後に回想している。

涙にはじまり、涙に暮れた一日であった。

3 「友情のメダル」誕生まで——ロサンゼルス・ベルリン五輪

1931(昭和6)年の大阪で、織田幹雄と南部忠平は再び顔を合わせた。南部は2年前に大学を卒業し、大阪の美津野運動具店に勤務していたが、織田もその春に大学を卒業し、勤務先(朝日新聞社)のある大阪へとやってきたのである。

住まい・職場が目と鼻の先ということもあって、2人は終業後、関西大学のグラウンドを借りて互いに汗を流すようになった。そして10月27日、同じ大会の舞台で、日本陸上史上初となる世界記録を立てつづけに樹立するのである(織田・三段跳び15m58、南部・走り幅跳び7m98)。

翌年開催されたロサンゼルス五輪にも、その勢いは持ち越された。織田は足の故障のため出場するのが精一杯であったが、南部はその無念を背負って見事に大役を果たした(三段跳び金メダル、走り幅跳び銅メダル)。一方、コーチとして参加した沖田芳夫は、社会人として働きつつ、時折母校の後輩たちの指導にも当たっていたが、今やその競走部を率いる立場となっていた西田修平も、棒高跳びで初のメダル(銀)を獲得した。

そしてさらに4年後、1936(昭和11)年、ベルリン五輪——。ナチス・ドイツが命運を賭したこの大会に、日本人選手団はブレザーに戦闘帽という出で立ちで入場している。しかし、日増しに濃くなる戦雲を払いのけるかのような、干戈を交えない「激闘」が人々に感動を与えた。雨模様の肌寒い天候のなか、西田、大江季雄(慶應義塾大学)、そしてアメリカのメドウズ、セフトンの4人で争われた棒高跳びの決勝はまさにその象徴であった。

メドウズの優勝が決まり、西田・大江が2位・3位のいずれかであることが確定した時点で、西田と大江は戦うことを止め(公式発表では西田が2位、大江が3位となった)、帰国後、銀メダルと銅メダルを折半して接合。いわゆる「友情のメダル」が誕生した。

なお戦後、この「友情のメダル」のエピソードは美談として教科書にも記載されたが、その文章を執筆したのは、西田が誰よりも尊敬し、また西田を見守りつづけてきた織田幹雄その人であった。

【主な展示資料】

この画像は著作権の
関係で表示できません。

南部忠平 走り幅跳び世界記録表彰状 1932年1月20日（北海道開拓記念館所蔵）

その日（1931年10月27日）、織田幹雄の偉業を目の当たりにした南部は、「身うちから熱い血が湧き溢れてくるような闘志を感じずにはいらなかった」。そして跳躍を終え、しばらく放心状態でいた南部が、「ふと気がつくと、織田君がしっかり私の右手を握りしめていた」という。南部はそこではじめて、自らもまた偉業を達成したことを知ったのである。



ロサンゼルスへ向かう船上での選手たち 1932年（大学史資料センター所蔵）

左から1人目が南部忠平、3人目が沖田芳夫、6人目が織田幹雄、7人目が西田修平。南部によれば、「船中での日課は、午前六時に起床して、午前中は散歩と軽い体操、午後は昼寝の後、一時間半から二時間のトレーニングをし、夜は一〇時就寝厳守だった」。

この画像は著作権の関係で表示できません。

南部忠平 ロサンゼルス五輪三段跳び金メダル（左、北海道開拓記念館所蔵）・
走り幅跳び銅メダル（右、個人蔵） 1932年

織田幹雄と同様、南部も足に不安を抱えており、走り幅跳びは3位に沈んだが、三段跳びでは本領を発揮した。

当日、大丈夫かと心配する織田に対し、南部は「心配するな。これから、ゆっくり抜いてやる」と応え、二度目の跳躍で織田の世界記録を示す旗を越えていった。

南部忠平 ロサンゼルス五輪三段跳び表彰状 1932年（北海道開拓記念館所蔵）

西田修平 ロサンゼルス五輪棒高跳び銀メダル 1932年（大学史資料センター所蔵）



織田幹雄曰く、「朝寝坊で、暢気^{のんき}者、しかもすべての人から愛された」という西田。銀メダルを獲得したこの日も、ギリギリまで「悠々と寝ていた」という心臓の持ち主であった。

2 枚の「友情メダル」

——ベルリン五輪における西田修平(上)と大江季雄(下)——



(大学史資料センター所蔵)



この画像は著作権の関係
で表示できません。

(個人蔵)



〔襦紗〕第11回オリンピック遠征記念 早稲田大学体育会
1936年（大学史資料センター所蔵）



織田幹雄「友情のメダル」『新編 新しい国語 五年（I）』
所収 1956年（大学史資料センター所蔵）

「三段跳び」の命名者・織田幹雄

「三段跳び」という競技名称は、実は昭和初年に至るまで使われていなかった。それまでは、日本でも英語名のホップ・ステップ・ジャンプ（あるいはそれを略してホ・ス・ジャンプやホップ）が使われていたのである。ちなみに、明治初年、はじめて日本に陸上競技が紹介された頃には、「兎の月見」という小粋なネーミングもあったらしい。

しかし、ホップ・ステップ・ジャンプではあまりに長過ぎるということで、関東学生連盟が織田幹雄に適切な日本語訳を依頼したのであった。織田ははじめ中国で使われていた「三級跳遠」を思い起こしたが、しっくりこない。「三回跳び」はどうか。やはり違う。そうした熟慮のすえ、ようやく三段跳びという名称が誕生したのである。

IV

陸上「競」技から陸上「戦」技へ

——先駆者たちの戦中・戦後——

戦時中、沖田芳夫は勤め先（三省堂）の同僚とともに俳句をたしなむようになった。1941(昭和16)年12月8日の句日誌には、こんな一句がみえる——「英米と開戦の日や初水」。翌年、日本学生陸上競技連盟は大日本学徒体育振興会に合流・解散し、陸上競技大会は「陸上戦技大会」とあらためられることによって、ようやく存続が許された。「そこには形だけでも、この地上に走り、跳び、投げる姿を残そうとする陸上競技関係者の苦しい努力があった」とは織田幹雄の言葉である。

戦後、南部忠平はこう述べている——「私は今も「オリンピックに勝てたのは、運がよかったからだ」と思っている」。彼のいう「運」とは、競技当日の「運」だけではない。時代に恵まれたという意味での「運」でもあった。日米開戦前後、彼は幾度か沖縄を訪れ、中学校や女学校などで陸上競技を教えている。しかし、そこで知り合った生徒の多くは、生きて終戦を迎えることはできなかった。

一方、ベルリン五輪後の西田修平には、三度目の正直よろしく、「東京オリンピック」(1940年の開催が決まっていた)での金メダル獲得という目標があった。しかし、自らも従軍を余儀なくされた戦争によって、それは幻と消えた。彼は無事帰還することができたものの、ベルリンの「戦友」・大江季雄は、フィリピンのルソン島で銃弾に倒れた。

そうして暗い時代を生き抜いた4人は、戦後、日本陸上界の再建に身心を捧げるとともに、かつての自分たちと同じように、世界を相手に戦える人材の育成に奔走した。それはいわば、第二の陸上人生のはじまりであった。そして今からちょうど50年前の1964(昭和39)年10月10日、東京——。「幻の東京オリンピック」から24年の歳月を経てようやく実現した母国でのオリンピック開催を、彼らはどのような思いをもって迎えたであろうか。そのとき、織田は陸上日本選手団強化本部長、南部は同副部長（織田の指名による）、沖田（当時早大競走部の監督でもあった）と西田は強化コーチとなっていた。

最後に、沖田が詠んだ俳句をもう一つだけ、紹介しておこう。——「スポーツの友と一献春惜しむ」。

【主な展示資料】



西田修平 支那事变従軍記章（大学史資料センター所蔵）

西田は工兵隊員として、激戦で知られるシンガポールやコレヒドールの上陸作戦などに参加した。

「武装行軍競走とは何だ！」

以下は戦時中、早大競走部に所属していた石田芳正の日記の一節である。歩兵の完全武装で走らされ、思うように練習ができないことへの憤懣が吐露されている。

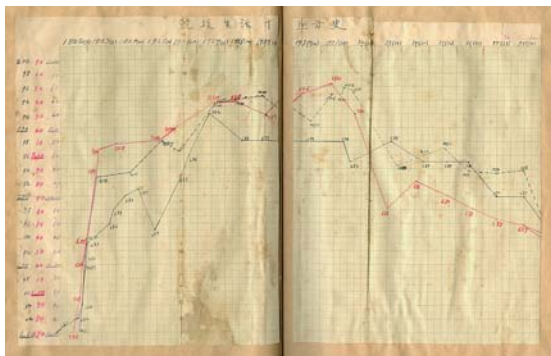
当時はそのほか、俵運びや手投げ弾競技が「陸上戦技」として行われた。

昭和17年3月29日(日)曇、冷曇なる風あり

本郷・帝大正門集合。名づけて、報国団武装行軍競走なり。……銃と背のう（砂袋入り）、ゲートル着用。ほぼ、歩兵の完全武装に近し。……帝大へたどりつきゴール。それからのあの苦しさ、母校までの辛さ、夕食時嘔吐。全くの疲労困憊の果てに死するが如し。

疲労去り難く、練習、意の如くならず、^{おう}鞅々として楽しまず、武装行軍競走とは何だ！ 誰にもブツツケられぬ怒心不満つののみ。

（『早稲田大学競走部七十年史』より）



織田幹雄のスクラップブック 戦後 2冊（大学史資料センター所蔵）

織田は第一線を退いて後も、陸上界の動静を記録しつつづけていた。彼が遺したスクラップブックは膨大な数に上り、その一部が大学史資料センターに保管されている。

写真は「競技生活十五年史」と名づけられた自身の記録グラフ（走り高跳び・走り幅跳び・三段跳び）。



西田修平 オリンピック・オーダー銀章 1989年（大学史資料センター所蔵）

オリンピック運動の功労者に贈られるオリンピック・オーダー。展示資料は西田のものであるが、織田幹雄・南部忠平の2人も同じく銀賞を受賞している。

なお、この3人は、スポーツの振興に顕著な功績のあった校友を表彰する早稲田大学スポーツ功労者の第1号（織田）、第2号（南部）、第3号（西田）でもある。



1994（平成6）年、早大競走部の80周年記念式典で顔を揃えた晩年の4人。
右から沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平と青木半治。

先駆者たちの言葉

〔沖田芳夫〕

よく競技で、一生懸命努力し失敗して、運が云々、身体が云々と云う人もあるが、運が悪いのでなく、身体のせいでもなく、相手は自分より以上の努力をしていたのであることに気がつかなければならない。

（『沖田芳夫伝 グランドに生きる』より）

〔織田幹雄〕

私は決して天才的な競技者ではなかった。私を強くしたのは、人一倍の努力であつた。

（織田幹雄『わが陸上人生』より）

〔南部忠平〕

スポーツだけが人生のすべてではない。これはスポーツ選手にこそ言いたい言葉なのだが、しかしまた、スポーツを通じて得ることのできるものも大きいと思う。

（南部忠平『紺碧の空に仰ぐ感激の日章旗』より）

《特別上映 「金メダリスト 南部忠平氏に聞く」》

会期中、早稲田大学映像情報委員会が晩年の南部忠平に行ったインタビュー映像を特別上映いたします（上映時間18分）。織田幹雄との出会いやオリンピックのこぼれ話など、本人が語る貴重な証言記録となっています。ぜひご覧ください。